

見通せない見通しと、見通せる見通し

日本大学 生物資源科学部 食品ビジネス学科 教授 清水みゆき

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大で、今年も新年度以降の仕事、学校、行事、生活など、様々なことについて先の見通しが見えない状況に陥り、それは今も続いている。辞令交付式はある？入学式？いつなら会える？会議？学会？通院？面会？いつとも約束できず、しかし授業を取りやめるわけにはいかず、組織は活動を続け、個人は生活を続けざるを得ない。

やらないのではなくどのようにやるのか、ようやくそれで動いている。人は予定や計画を立て、時間、体調、人間関係、資金などのコントロールをしつつ、見通しをつけながら生きているのだと実感する毎日である。そんな最中、歌舞伎座前の某弁当店が閉店するとの情報を知った。歌舞伎座への来客だけが顧客ではなかったであろうが、閉店のご挨拶で、「諸般の事情」としながらも、また歌舞伎座より20年以上も早い創業にもかかわらず「歌舞伎と共に今に伝える江戸の味」を信念にしていたことが綴られており、その顧客層が想像される。歌舞伎座の今後が、すぐには見通せない状況であることが伝わってくる。これも、この先どのようにするのかの一つの選択肢ではあると思われた。しかし、インバウンドによる収入にも目途が立たなくなり、またそれを見込んだ商品などの行き先確保のため、農水省も補助事業に乗り出してはいるが、飲食、交通、宿泊業などの関係者が大変苦勞されている様子を見聞きするにつけ、「どのようにやるのか」を見通す際には、「リスク分散」が非常に重要な柱であると改めて思う。

ところで、新たな「食料・農業・農村基本計画」が3月末に閣議決定された。今回新たに設定されたのが「食料国産率」という指標と、「食料自給力」指標およびその「見通し」であった。

前者については国内の畜産農家で飼育、出荷された畜産物は国産飼料か、輸入飼料かのどちらで飼育されたかにかかわらず、国内で生産された畜産物に対して用いる呼び方であるが、これは誰に向かって発信しようとした情報なのか、正直ちょっと悩まし

い。消費者の実感に近づけたということであれば、国産畜産物の販売に際しても「国産飼料の国産食料」と「輸入飼料の国産食料」という表示が、最も消費者に分かりやすいのではないだろうか。教育・研究資料としては従来どおりの自給率と国産率が併記されるのだろうか、などの心配も尽きないのであるが、用語は可能な限り統一され、それを頻繁に使用してほしい。

現在でも農家区分が専兼別と主準副業別が並置されていて、高校の教科書レベルでも統一されていない。そのため、この用語が出てくる度に、1年生には説明が必要となる。この消費者に分かりやすいだろうという指標が、本当にそれが分かりやすいのかどうか、是非とも消費者アンケートなどを実施して明らかにしてほしい。

そして「食料自給力」については、今回「見通し」が追加された。前は、現状の農地、労働力を最大限活用した場合の可能性が示されていたが、今回は農地の確保、単収、労働力確保等が向上した場合の「見通し」が示され、とりわけ全ての確保が進み、それら資源を最大限活用するよう最適化した場合は、推定エネルギー必要量を超えるエネルギーが確保されるという。

先を見通すことができ、かつ、それが悲観的ではないとすると、日本の「食料自給力」もなかなかではないかという感想もなくはない。コロナ禍だから見通せる資源があるだけまだ良いとも思う。しかし、なかなか上がらない食料自給率と増え続ける輸入依存という実態について、「食料自給力」と「食料自給率」という言葉が並置され、誤解されないこと、そして楽観的になりすぎないことを願うばかりである。力はあるけど発揮できないという環境は十分考えられるうえ、63%の輸入依存度という「リスク」はやはり高いと思う。

